

卷之十一
種石
鞍河
臺志

四
輯

拾



A vertical ruler scale from 0 to 30 cm, with major markings every 1 cm and minor markings every 0.5 mm. The numbers are color-coded by decade: 0-10 are red, 10-20 are green, 20-30 are blue. The word "JAPAN" is printed vertically near the bottom.

太 珠
位 流
志 河

燕石十種第四輯卷十

江戶畫會

活東子輯

14
679
43

寺地あり宇都宮侯邸へ松平西福寺其少も西念寺惣隨意院滝川氏
経木^{経木}高林寺あり又稻毛小路元ハ野原町今ハ
堺川差子郡面敷 堀田氏^{堀田氏}家えハ百姓地
少も寛政の始まて至年貢地と唱^{シテ}是も^{シテ}考見^{シテ}に點所を書のち
歸りま^シざ行^シと至年貢地の有^シきや^シ地^シと^シ又駿河亞桐小鶴^{クニシ}地^シ
行^シと寺の久安彌^リ有^シきや是も^シ疑ひもあ^シキ^シ也富士を^シまも
あ^シバ懼^シふ富士見^シと^シい^シ也^シふ更^シよ^シの名^ハも^シは不審^シあ^シト^シあ^シび^シ
わく古先の傳^シを信^ギて自己の考證^シあり^シと尋ね^シも^シと又更^シが得^シとも
あ^シ去^シとも北條分限限^シふ^シ戸^シ芝崎^シ石^シ百十七貫^シ石^シ文^シ古田大膳亮又^シ臺
貫^シ石^シに捺文^シ向^シ尾安^シか古田大膳亮御内入大膳亮書^シ至^シ業^シ新^シ堺方^シ
所領替^シ由^シ尋^シ新^シ六郎^シ衣^シ中^シ高^シそ^シ出^シ前^シ肉^シ少^シ祀^シせり
さそ長禄二年^シ戸^シ島^シ所^シ考^シまは^シ芝崎村^シとい^シ今^シ宇都宮侯邸^シ
を^シを^シる^シが^シど^シ（神田橋^シとい^シハ伝^シれ^シれ^シを^シを^シい^シふ^シか^シれ^シを^シ神田村^シの内^シ文^シ芝^シ房^シ
然^シ時^シは^シ是^シ駿河^シ卷^シつ^シも^シ古田大膳亮^シが^シ不知^シや^シ高^シが^シ御^シ駿河^シも^シ城合戰^シ

時上杉吉庫が清方
としる時も頗りんちふ縁て所の石すも有らなか外に
ひ例多くあり今この鷺村せふえのの者に帰りし左の名とりて
地こかや友人隣水なる者の考ふ考範集は續くまほむの國豊鷺と
之郡に入じか事たる所は恒竹りる前ひよ草あご蟹うて席のつまよ
もくすもるの遠き所かれハ獨り安ゆくゆきわづる都人のりり
て経り夜かげて火消あても軍隊と身をたれよかく枕をそぞら
うれども軍使す人の声もとの遠きを軍かくとくとかもちをこそとして
都人のよき「曉の舟」ともひするあわせよろかひよりを席といらん也
孝範 軒廻く麻立あらずす宿をひ多侍トよきものうひよともきりこち零
是の所の事あるべくとしくりともあらうとあらずすやも、櫛床背と
以て毛櫛床坐作トけ候も所とも此願最まうり長禄二年太田城中も資長
羽活入道トて通灌となりと杉家の為ふ名城を取立んそばに壁城を取立ん
味方の多くもあひよ繫く盈々んや戸城もえまち國が蟹を下 東会戰記

小笠原城を南造壁せ立木のそと廻五年丙子ノ建立

をとひ世に傳ふる年甚
は地明暦二年の大火よ焼
後ハ

年月日
小川町

占歴史也 時袋町

多きまことに類焼ノ一明和九年二月十九日同里人坂より出火にて筋遠櫻神田
見附焼失一幸山正處焼ノ一ひ地も類焼セ一ども櫛石の爲給あ矣今後は有
血箭また済河町猿町筋河町もこを焼す其舟屋の因少て僅の過火アリ
シモシモ忽ふ消靜アモカクニモキサア一是高涼の地也あらず

ひ地より是方へゆきあらおり抱坂の小川町口三河町に觀音坂の筋邊櫻のもり昌平
の傍筋坂とす青所あり筋邊口へ塵坂とす青所行り觀音寺坂の字都宮産裏
三府内産裏とす二つの坂不入り三河町口へ大滝産腸の青所あり 細い青所は波多屋
小川町口へ長崎氏弟の傍ふ坂を構へ抱坂を坂下に坂不入り 坂下へ背
御車をませつゝ青不入りゆふ青所の坂を越へ是ど十三本の篭ともりが
ひ地南東へもくちづくうみにて篠町坂畠氏弟の腸より西を絶壁數丈甚険
ア北を神田川の岸切立て砂利を撒滿る

時へ堤の左を渡を猿えりも城北の要地なり

胸突坂を實政に率の江戸圖より甲斐坂とももを見ても觀音寺以下の通りをも
甲斐町といふをき是を甲斐と云ひても詳されば火消屋姿を是より建らる
ゆゑ見て甲斐の者をもむふ今せてもりや甲斐郷の者を是地ふと
ことかくはるゝ下又中川氏弟の服より堀田氏弟の服近の時ハ享保のまふ用
かれと見ゆを確へ享保七年圖より丹波所通がだ篠町の左あらわ
篠町 戸田又助而後前より事ゆる延宝四年の武藏が波の篠町
美地あり篠町師を地を發のちくらみ居てそぞ地ふ支配をも並びりも今
ある事一ノ歳ソノ

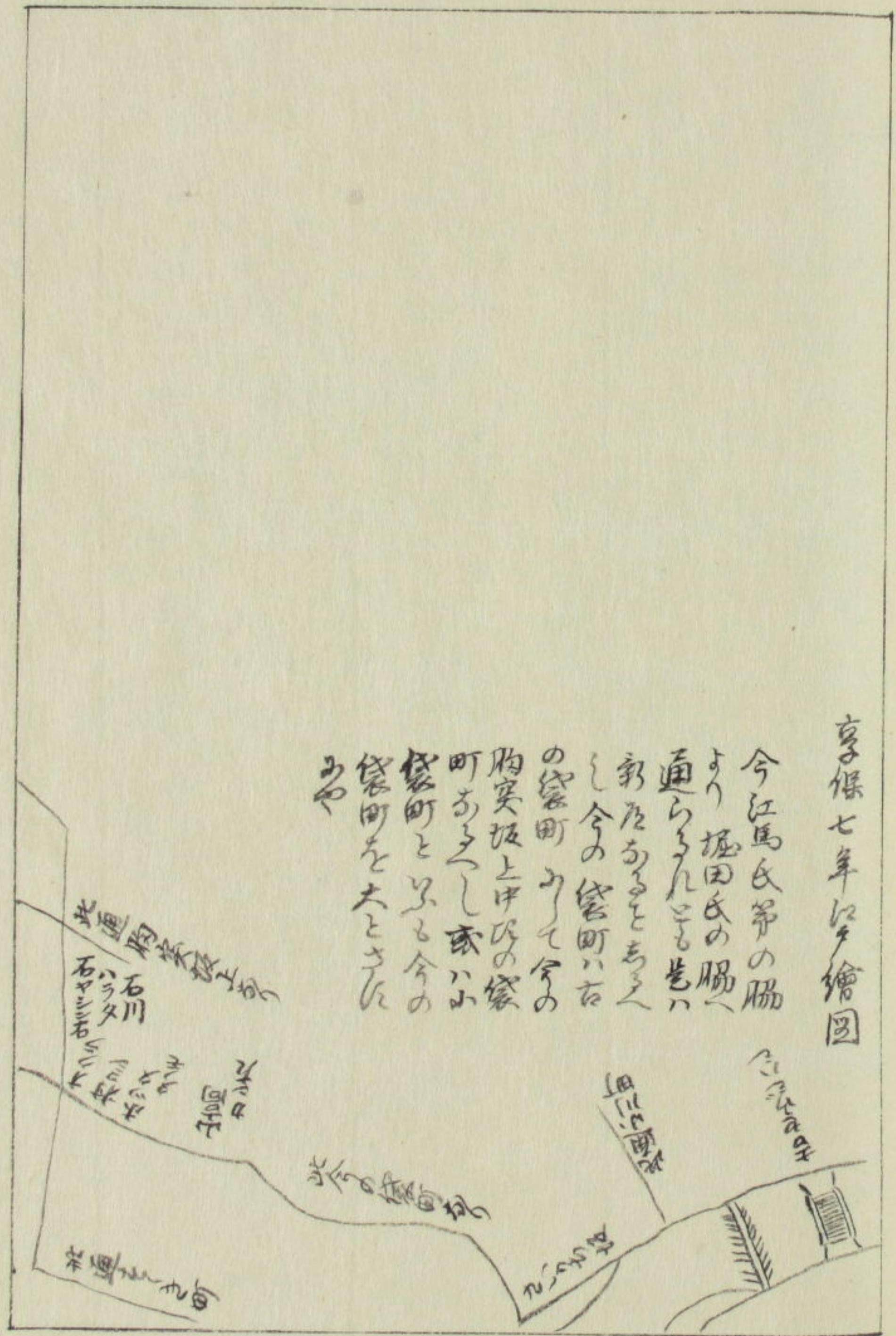
伊勢町 駕馬町
雁坂を登り堀田伊勢も兼通す。水道橋の向又ハ胸突坂
と中川光弾も居安照より坂田の左发脱逃をも駕馬町と云又ハ今河野千吉而
居安照の通すと云ひ居角ありしゆきよしゆく駕馬町と云等橋火事の付文

今の道を元へどつて

詳小史

老々瘦死せ
の道の上に
の解く
金木町　杷坂とちも通りの町を以て金木町を號す。左
名ニ國りしあとび。享保七年の總考ふ。金木町有居。延享十九年更替ま左門
今川義高。金木多喜也。あとづちの金木町名残なり。是より古者姓氏緑佑られ。改
め居たり。金木多喜也。あとも叶ひて、いと因ひて改事。之を

後で経由したる所を残る所
稻荷小路 沿路坂と左田姫稻荷の前を以て是より西の方をも稻荷山邊
又甲斐町丁目の裏を駆け西町の通りにひきもむくの寺地ありと見ゆ密町
平川善光寺の通う安祥洋二郎居候より三十年前より鬱
く毛糸を纏ひてとあるをちの葬地と見えたり其きどもこれと云ふは寺の
四地とあひて之を沿路坂と云ふ松下老人と云ひて此處を
加茂若林修業左門を安ましを稻荷山邊といふなり



神田神社舊地 神田神社を今一橋山館のうちふ有^{アリ}神田志アリ、然るふ慶長八年駿河縣^{シロノシ}からまわされりといひて行變すや又芝崎道場ハ寛永九年の仄西福寺西念寺あるの左し今戸田日向守邸之と思^{アリ}也。是稱思^{アリ}也。御臺坂过惠^{アリ}石室而來^{アリ}去源石室を掘出^{アリ}平井寺阿休。其因ふち力と聲の毛打^{アリ}しこりや然るふ掘^{アリ}よりの粒氣^{アリ}。ソリ^{アリ}を後又元の^{アリ}收束をふ妙見社を勧請し後より八破彦^{アリ}と號^{アリ}。白川少將宮俊朝臣額を書て号^{アリ}。石室^{アリ}。神田の社地^{アリ}。暮^{アリ}。あらん。

駿河縣^{シロノシ}より雁木坂より抱坂^{アリ}。甲斐町の畠を神田の畠^{アリ}。神田の^{アリ}も^{アリ}。け當^{アリ}。かふ玉^{アリ}。雁木地^{アリ}。日輪寺を神田^{アリ}。日輪寺を神田^{アリ}。高持資深院^{アリ}。雁木^{アリ}。神田の社^{アリ}。よみ竹寺^{アリ}。

嘆^{アリ}つきをあさりをもます^{アリ}。をのむ^{アリ}。歎^{アリ}す。慶長八年

小今の駿河縣^{シロノシ}より^{アリ}。とくに^{アリ}。櫻^{アリ}。とくに^{アリ}。自えの葉岡道場^{アリ}。

穿鑿^{アリ}の況^{アリ}。金^{アリ}。とくに^{アリ}。神田^{アリ}。とくに^{アリ}。要^{アリ}。

太田姫稲荷社

淡路坂の^{アリ}。堤^{アリ}。源^{アリ}。あり西城の鬼^{アリ}。つね^{アリ}。是

ゆう^{アリ}。移^{アリ}。か^{アリ}。こ^{アリ}。

社號^{アリ}云姓古參議笠置隱岐國^{アリ}。配流^{アリ}。その財海中^{アリ}。老翁^{アリ}の姿^{アリ}を隕^{アリ}。告^{アリ}。ある^{アリ}。自世^{アリ}の姿^{アリ}を雕刻^{アリ}。しを左^{アリ}。て^{アリ}。城國^{アリ}。石室^{アリ}。鎮^{アリ}。

移^{アリ}。ある^{アリ}。しり^{アリ}。昌平橋^{アリ}。一^{アリ}。橋^{アリ}。の^{アリ}。櫻^{アリ}。

砲^{アリ}守^{アリ}。若林蓋^{アリ}。老母^{アリ}。稻荷社^{アリ}。佐^{アリ}。源^{アリ}。砲^{アリ}。別當^{アリ}。松竜^{アリ}

安堂院^{アリ}。

壽^{アリ}稲荷神社

猿町^{アリ}。下^{アリ}。御^{アリ}。石^{アリ}。殿^{アリ}。

永井稲荷神社

猿町^{アリ}。永井^{アリ}。數^{アリ}。員^{アリ}。也^{アリ}。初^{アリ}。か^{アリ}。鼓^{アリ}。不^{アリ}。難^{アリ}。

を^{アリ}。度^{アリ}。永井^{アリ}。筑^{アリ}。崇^{アリ}。景^{アリ}。奉^{アリ}。た^{アリ}。し財^{アリ}。被^{アリ}。地^{アリ}。勲^{アリ}。翠^{アリ}。

よひ方とて例の竹ノ物事等一が大燈籠の繪より長崎奉行道中の體を畫さしり然るよ如何あるとあらんまほの三ふ物を畫くことを忘れしり去ども心骨もせど有しげをばぐて彼地より施主を病死せらん。飯を御走りうり是事大燈籠の繪先表をり。愈し是よりしてお礼日より禮子を止らきりと成かしらん。

春日神社 築町より馬乞を申すありして今も坂田伊勢守副地山ありて春日氏下堂へ移り。社をも又移されたり。馬場もあり。

防火隊

甲賀町もあり

神田見附 美濃武藏戸田采女ふ氏信郎神田見附の内角と見て、神田見附筋邊橋へ古き名ある也。因より橋へ川上筋邊よ坐せり。九年二月廿九日因より人坡より火災ひ邊も多めふから見附も橋と云ひ是今の筋邊門を以てゆく所。筋邊とりそも橋の名と見て、かく寛文十年の圖より始て橋の名へ見えり。然らず美濃の武藏戸

幸多能登ち郎を筋邊橋也と紀す是今のが知らるる事あり。然る時、神田見附筋邊橋へ古き名ある也。因より橋へ川上筋邊よ坐せり。九年二月廿九日因より人坡より火災ひ邊も多めふから見附も橋と云ひ是今の筋邊門を以てゆく所。筋邊とりそも橋の名と見て、かく寛文十年の圖より始て橋の名へ見えり。然らず美濃の武藏戸

昌平橋 筋邊橋の西ふから寛文十年の繪図より始て見てあらじ。橋としり共く冊紙も一卷で架せり。やがて革洗橋といひの傍にさかへ寛永の名より見えますをりそもくわらうらむとあらじ。右田坂を一里ニツツ後よりあらうの坂を一坂といひ橋を一坂も。こりあらうから人のいひゆ。後世は布晒橋ともいひん。は橋のうちふ牛車の制れりをか。寛文十年の國から舟ありとひ今橋向ひの船宿より津路及上場のゆゑに朝船宿なり。また湯島横町よりあらう是昔は昌平橋もあり。や筋邊外には三軒ありと。瑞昌平橋の東よりあり。昌平橋一名ハ相生橋そり。昌平橋ハ元様改りの名あり。

又モ平橋ニモカナリ

抱坂 水道橋内坂八筋た處の浦脇の坂あり今ふは喬木の裏邊の下の草
迷子もあり古昔には坂より數步抱樹の有りて名とありしこり是も笄橋
大車の附焼失へりて今ふ抱の古木あ一塊民家邊の小方より松を
多く植てりけ坂より望むは遠くハ破嶺至中の芙蓉を冠す近づく
八重の高尾のひね友達の舟を望ま一一小景あれども絶妙あり又水道橋より
至らば孤石樹立背後にて深林の飯きあり

袋町の通入り河野千吉節を發前まことして御用ありしが笄橋の火
事ふ今之如くありしとつとも享保七年の冬既に今のでくは時よりに
あらず明暦大車の時も有ちん走詳

雁木坂 袋町之下御用面發の井戸坂をりつけ坂よりに城を主とす新屋氣
氣あり今ふは坂より通ありて左側の下水を皆是が流へ居す二十年程前
少々坂中ふ植か一例ハ神田川の岸一も側の底ふ水を引取園といふ也

見附

胸突坂 袋町中川丸陣も五郎赤の坂ありひ五月秋の朏を言語ふ絶り東
海道里の宿(一覧)と書をなし室櫻草の面發もひ坂と今ふ中川丸陣も
忠英朝臣の庵浦山馬平左衛門の面發裏なり寛政に年のは戸田の坂を甲斐
坂と名づけたり或云甲斐坂ハ今火消面發裏門前のか戸田に向ち郎の裏の坂あり
こりへり是說是あらに由一胸突坂の峻壁あるよ因て名有一あるべ

池田坂 袋町の東池田者次郎面發前の坂あり又鹿太坂とい池田より狭大
ひくへり名とあり一これや

觀音寺坂 甲賀町の南戸田に向ち郎脇の坂之前 の坂今松平長のち郎
俵草觀音もありし左の名とひども觀音寺を俵草に有一幸東體つも
見えられひ爰はありしこれは坂もひ或は坂の石場より觀音寺の傍わりあざりも
ゆきなり寛永に至るよびぬる觀音寺といひ是邊は木戸うちの觀音寺する
有爲也

庚坂

甲賀町の東坂部たまを岩脇の坂へかへぬ坂と云ふ今甲賀大浦
色浦のあさひに寺ニリ有一の其卯塔の邊此坂をかく名付ケ一寺
支を渡ふ庚嶺坂改メニシテ是ハナリメ紅梅坂とい坂ある左之

紅梅坂 大浦源の東戸田に向む郷裏の花の通りの坂あり是が辻恵志而
尼寺の紅梅の大樹ありて性善の枝より出でる毎年能飲ありしたとえの
樹の内も今新樹を植テ

庚路坂

福井山路より昌平橋へむかひ坂ありや名を石坂ニリ松下庚路もひ

山道

庚路坂そひはほく辻番所の裏よ松やひ

有徳君より賜りくと拂あり寛トヨ昌平橋を至らば絶景なり
麻布ちああよ革洗坂同名にひ坂と堤の下のむ根ふ緯元の人あり享保
年中のとあるよ 松下庚路も伊集院

有徳廟

一言せよとあて其下より人魂ちよび塚て見ゆる

仰りて為塚ノハニスを底シあり魄ありし老松木の木を伏モ體を而捨

久の其後ハ行ふ事もあらう

之傳へゆり

幡隨意院舊地

昌平橋内より家院西參より松永市右衛門参並の内

ありとひづ今小墓跡の升戸とわからず升戸有折く骨を掘出も事なり

近き近鴨宮氏居處 今春田井又希 九年内の事あり より骨を多く掘出せ一事あり 寛水

の候是が昌平橋をく今の山田 九年 常の沿い松永市右衛門参並二事あり

室院西參より寺ニ転ぢて 今水の爲を佐毛り 九年内の事あり

神田昌

和恩寺そむ即ち平二石慶長年中向道より人の同基より園東十八株林の内

向道文ハ元和元年八月より遷化あり也と遷化ゆ

妙龍水

松永氏居處の内よりは逸ひ所の升戸も用ひてたゞひ水の清涼

ありゆく如何ある早懸山も乾く事あり妙龍女之事ハ世人普く知る事

今度ふ省く 溝口直溫朝臣妙龍 水の爲を佐毛り

九年内の事あり

或ハ池ノ端加茂溝頭も恭豊朝臣庄宗の井也

り 挽幡隨意院の板倉の

古文書の事あり

西福寺舊地

寛永九年の繪圖が今戸田に向む郷あり西福寺は貞譽上人

開基尊は安阿彌が作如來あり即ち平石豊後郡の内なり今ハ空缺

候毛り

西念寺舊地

寛永九年の繪圖が今戸田に向む郷の小西福寺の譲あり

觀音寺舊地

近江國栗生郡

觀音寺の事也觀音寺は園ヶ原

御陣の時大津少佐村誠義助差り園東の山用勤もさき園を傳され
その後の大坂山陣の時も山傳し永原子山殿奉以并而この修理を承
そり是既蒙う時あり乃買う法孫妙舜う時まで近江大和の役
官をも勤して奥享二年六月十九日大尼法宗も彦坂伯老自ら冲山
源波も佐野六本通國領半去清連名も多羅尾山前右近の觀音寺
羽舜友人を至れ六月又日波地後是と同廿日山产屋敷よ到着
同廿日辛亥朝又吉清大米清右衛觀音寺面當に走り同道を解
跡石を植え候み居る事とすと玄済同廿日山役石放て在因門
作舟若林信濃も又波も同ニ辛亥八月八日因レ佛免育才七日山代官新
添勘定は秋中より仕立可レ者玄済舟山用済として九月芦浦山場事を
申用玄済舟立役中を並びを着一革刀少佐馬鎧を身持天台家
清僧なり羽舜う法嗣智因以策院家僧ふる任レ威ハ甚矣も歟

多々清水谷中納言家の息をりて法嗣とす寺領又百石桔吉石余觀音寺
記曰山部の内山致り所元和从弟少佐之媛志帳面書所從以元和从弟山部不
高井延室八年より和別山内山致り所玄済舟山右互役中山形ノ不山別
和別高左紀ス

元和年中

一山別栗生郡

野洲郡

高武万石子九百石余

寛永年中

一山別栗生郡

野洲郡

高三万石余

正保年中

一山別栗生郡

毛智郡

高三万石余

慶安年中

一山別栗生郡

野洲郡

高三万石余

嘉慶年中

一山別栗生郡

野洲郡

高三万石余

明暦年中

一山別栗生郡

甲斐郡

高三万石余

寛文年中

一山別栗生郡

甲斐郡

高三万石余

延寶年中

一山別栗生郡

志賀大上郡

高三万石余

同八年

一山別栗生郡

志賀大上郡

高三万石余

天和年中

一和列

要ち甲賀野例
志賀蒲生多鴻

高三万八千石余

同年中

一和列

要ち甲賀野例
志賀蒲生多鴻

高又千石

貞享年中

一和列

要ち甲賀野例
志賀蒲生多鴻

高三万四千石余

同年中

一和列

要ち甲賀野例
志賀蒲生多鴻

高又千石

高林寺舊地

高林寺ハ經本町瀧川氏而造ふりしと見是古く茶水を
飲せ一石あり今人跡込め核りてそひの皆邸弟ニある三十年程も花よ今之輝
伊ニ前屋安^{今早川善右衛門安政を以て安保の家也}輝^{安輝家も善政の之後也}より毛茶を多く掘出せ一と石り
高林寺の葬地也をあらず

卯茶水

天正改ハ駒込至高林寺今経本町経本丸左美風姿向ひて有^一と
かや其^一高林寺の井戸を山茶すゆ^一セラモ^一うり山茶の水と^一名を有^一
しとりてちるふ^一石治年中松平陸奥守綱家朝臣^一 美風姿を繕つて卯茶水^一

林寺後を堀切て瀧川^一流^一是を神田川^一と^一は竹^一木^一林寺の井戸は川の
向^一の瀧川^一を源^一の^一を強^一きり^一終^一ふ^一寛永^一に戸固^一は神田川^一から^一不^一所^一無^一水^一而^一堀切
しき^一水^一と明^一く^一あり是^一が堀^一然^一の^一と^一傳^一傳^一り^一も^一かく^一かく^一と^一林寺以
御^一移^一され^一も寛永^一は元^一の事^一ある^一今^一経本町^一美風姿^一の裏^一より至
り^一か^一ア見^一ゆ^一か^一あり^一か^一な^一水^一を^一活^一水^一あり^一高林寺駒^一込^一の^一毫^一有^一て^一其^一の井戸^一あれ^一
は^一茶^一水^一ハ駒^一込^一の^一附^一く^一事^一ふ^一こ^一持^一

金銀水

甲斐河千田元齋^一が家の井戸^一あり^一水^一を安^一藝^一と相^一活^一金銀水^一の紀を

作^一き^一り

山鳥糸^一 桜坂^一と^一か^一の^一ぞ^一生^一あ^一り^一そ^一ん^一を^一山^一鳥^一糸^一と^一ま^一る^一雜^一子^一糸^一と^一り^一は
逸^一往^一古^一ハ林^一繁^一り^一て^一烟^一草^一と^一も^一り^一あり^一て^一野^一雜^一子^一糸^一あ^一ど^一も^一笑^一く^一絶^一一^よう^一の
名^一な^一ら^一る^一る^一

鳴鶴谷^一 袋^一町^一堀^一田^一伊勢^一一^般朝^一厚^一の底^一中^一ふ^一り^一如^一芙蓉峯^一を^一望^一み^一る^一ハ葉^一
の^一婉^一葩^一世^一系^一肩^一の^一花^一連^一も^一絶^一景^一と^一い^一る^一或^一云^一春^一日^一氏^一在^一處^一の^一點^一十^一猿^一樂^一町^一中^一

久津見氏底姿の鷹を古のもの音の里といひ立とうきよよりく家ふ量名の
名も有へたる爲

雁木坂下山下流焉底姿のり小今も山木とありて満ちて若は是
をあう剛といひ一往三十年程以ては袋町の下水南側の剛(廣て南)
底側の少流也と餘赤荷川久助底姿赤土席あつて堤下の神田川
底せとひそひ雁木坂堤切らずりそを剛のとふ二尺宮方後ある石を
井桶のどきりの有て小火のた戯場ありしこか

小漁遠江守安政一船所始の君ハ新蒲溝佐助近江國淡井佐藤也長政、類と
リ勧解由左衛某^{スル}殊^ハ助^ス次^ス始^ス豊臣家^ノ社元和九年月日遠^ハ任^ス伏見の奉^ハノ^リ和歌^ハ冷泉為頼卿^ノ
門人冬事^ハ古田織部^ハ勝室^ヲサ^ハア^リて志^モモ極勇^ハ寛^モ殊更古矣
の賢^シ之^ハ名^アリ松花堂昭吉^ハ義林通春法^ハ佐^ハ因^ハ秀^ハ昌^ハ破^アト^ク親^ハ
ウリ別名^ハ大有^ス、宗甫^ハ城^ハ疏蓬庵^ト号^ス 大徳寺疏蓬庵^ハ英^ハ徳^ハ
山海遠江守安政^ハ甲斐町今^ハ年織部^ハ難^ハ度^カアリ天明八年八月有^ハ加泉^ハ政^ハ承^ス府伏見奉^ハ乃^ハ
時^ハ羅^ハム^リト^リ列^ハ小室^ハ至^ハ万^ハ石^ハ三千石^金を^ハら^ミ相模國山田原^ハ太^ハ保^ス加賀^ハ少^ハ缺^ケニ^ハ成^スま^リ

改易^{シテ}

室新助直清字^ハ師禮^リと^ハ加賀國の人金澤の儒居たり學^シ同^ハ本^ハ領^シ
門人白石祇園寺市^ハも^リ同門あり西德元年三月^ハ合^ハ石出^ス新^ハ武^ハ石
を賜^フて直^ハ學^シ士^ハ底^ハ萬^ト号^ス又駿^ハ墨^ハと^リ享保十九年八月十二日
仍^ハ年七十九^ハと^リ歿

室新助底姿^ハ今^ハ金^ハ河^ハ源田^ハ経^ハ勢^ハとは馬^ハ平^ハ萬^ハ之間^ハ底姿^ハ國根^ハ番^ハ宿^ハ日^ハ新^ハ
底姿^ハト^リ時^ハを^リ金^ハ底^ハ異形^ハの^リ見^シ本^ハ家^ハ人^ハ別^ス人^ハ考^スて是^ハ見^シ本^ハト^リて
家人^ハ氣^ハして家^ハ口^ハ多^シ聲^ハ初^ハと^リ考^スて是^ハ底^ハ異形^ハの^リ見^シ本^ハト^リて有^リ人^ハ家^ハ口^ハ多^シ
ある所^ハ必^ハ考^ス事^ハ有^リト^リ是^ハ本^ハ考^ス事^ハ有^リト^リ

白櫻

甲斐町平坂伊賀

相^ハ庭^ハ底^ハわ^リ吉野^ハの種^ハ移^ス

植^スリ明和九年火事^ハ焼^スリ^トを伐^スてその根^ハ生^スリ^トが今^ハ大木
となりたり先年^ハ清水殿^ハ称^ス古^ハ長尾祐考^ハ寫真^ハモ^レア^リしを
差^スうつ^ト載^ス

坂塚^ハりの木^ハ 竹内町坂塚^ハの底^中に^アリ毛樹^ハ大^ハと形^ハ三方^ハ
朝^ハ一^ハ邊^ハ有^リて山^ハ同^スと^リ有^リ伏拂^ハ事^{叶^ハシ}と^リい^タリ

火事の記
極本をうえ
ちとあくこ
をしてひとてぬ
曲車一歩也
五月

草木制れ 神田川のあゆ堤とふあら松坂とふられの文字をうあくす
蛭井町辻番所の堤とふあらりの文字をうあくすそれと大日本保育院
ありきもどもいひまは普請奉行より建をもじれば立候の年月
あらあらのかし

堤上の年は一年よ

後づらぬばくからとて其の年は大日本の方とて賣拂とある

牛車制札

昌平橋内松平伊賀ち辻番所の照り行り

補遺

駿河産防火隊

火役宅千石八十二坪
細屋米千石九拾二坪

万治二年八月廿一日始て建地坪三千石七拾七坪 細屋家坪九百に捨入坪想建坪
内に面有九十三坪ハ火役宅米九百石方坪七合又久ハ元禄十一年 輕焼
千石九坪七合又久 細屋家坪外古藏主新六坪之 元禄十一年 輕焼
明和九年二月廿九日水野至賤勤役中 輕焼 安永二年普請成就

火消役

万治二年八月

水野半左清

又子石之
晏公後持

延宝四年十月

大久保源右衛門

又子石
晏公後持

天和二年四月

横田基右衛門

又子石
晏公後持

元禄十一年十二月

船越又郎左衛門

又子石
晏公後持

享保三年二月

永井修理

又子石
後死

享保十二年七月

三浦玄蕃

又子石
小姓

寛保三年三月

高木宮内

又子石
元

寛文十三年四月 水野十左清 又子石之
晏公後持

水野十左清

又子石之
晏公後持

同九年四月 安藤左四郎

安藤左四郎

又子石
晏公後持

元禄八年二月 神保至賤

神保至賤

又子石
晏公後持

正徳二年二月 小出至水

小出至水

又子石
晏公後持

同七年七月 内庭外記

内庭外記

又子石
晏公後持

同十一年八月

内庭外記

又子石
晏公後持

寛延二年二月 石河至税

石河至税

又子石
晏公後持

宝暦三年六月 巨勢六左衛門

同九卯四月

曾我至水

又子石
山小性

明和二酉 八月 水野主膳

天明元年九月

横山内記

又子石
天明元年九月

同六年八月 堀田主膳

寛政六年十月

戸田大學

又子石
寛政六年十月

享和三年九月 戸田内膳

文化七年十二月

米津小吉支

又子石
見延後元

文化一年九月 戸田内藏助

又子石

○因云

巖有院様即代万治元年新規火消役四組

作曾於茶水 飯田町 鶴町

小石川傳通院前町同二年八月廿日二組増す駿河臺 前元同二年十一月廿日八代例行落

代官町上二組分 仰付寛文二年二月廿日市ヶ谷 さと駿河臺上二組分 仰付拾組ある

常憲院様御代元禄八年三月十五日渕町 木坂 渦池 幸橋 神樂坂今番町 二組を増す

十六組より宝永元年十月十三日木坂河臺 代官町 前元 渥池 幸橋 神樂坂今番町 二組を増す

志山坂至其後絆御山入人となりる

○貞享二年始より十一月十五日近三十九酒毒云 仰付元禄九年八月廿日季冬酒毒可勤旨矣 作曾

徳六年七月十九日酒毒 御免

警力

伴源又左衛門

角切ガリ 横木丸

廣済市筋右衛門

市字

心辛刺助

持

鈴木八十郎

角切ガリ

和田八十郎

水字

鈴木八助

行曾

九郎金藏

水字

大鷦

若左衛門

根尾金友造

水字

同人共以

井上由右衛門

三差葉

家城忠之助

中野松太郎

見曾

田中忠左衛門 勝間秀右衛門 鈴木新八 喜鶴勝之助 井上久又郎
内田金十郎 心口伴之助 高橋善房 津田常藏 又味松之助
喜川勘右衛門 小堀谷喜三郎 飯野吉次郎 古田熊吉 清水捨三郎
長岡新藏 松井斧三郎 横井良左衛門 西村源右衛門 小川源右衛門
長田慶吉 中野松太郎 青木源十郎 九郎金右郎

方角

筋透御門

赤竹町 逸外神田内神田八今川橋 逸子経木透下谷中透下谷源事馬食町追延筋八
紅梅透昌平橋透不の脇(傍)

本挽町

吉神明前 新源透 加茂ノ町 麻布道筋ハ和田会を立
肥後郷を立坂下赤外橋田(古)

常盤橋

赤坂町 八丁堀 中橋 靈岸橋透筋神田橋を入道三橋
秋元の脇(傍)

京橋 張地洲道筋ハ辰の右八代側の岩山渡屋敷(片)

幸橋

赤坂山門 赤坂山門 本挽町
赤坂山門 赤坂山門 本挽町
又丁目左(紀)表(ノ)前

四ツ谷山門

四谷造鞍馬橋筋大曾根河於服神保山路廻橋
九段三番町古番町

市ヶ谷山門

牛込川國廣大久保市ヶ谷本村通
道筋九段三番町

牛込山門

牛込堀端町西ノ店舗牛込造筋袋町梶坂
水道橋も通小石川より通
牛天神前隆慶橋小日向水道町傳通院茶道

小石川山門

大塚青羽町同白
牛込元町春日町を以駒込白

水道橋

○山下山門新橋喰透右山下本ハ太鼓をもとより

太鼓打様 改替ナニツ拍子亦可ヤ事 為初太鼓又ツ赤てヤ事

近火あらハ平トロセ 直ト太鼓改ニツ拍子三十種ナテ赤面二ツ拍子のとく赤更
ちとハ弓をのべキ事

赤面を鼓鐘數三十種アリテ

赤面を火篭アリバ宣教寺及モ火篭アリバ事 熱田帰内改替ナ
火災ヨ見極メ曲牆印アリセキ火勢強ハ直ト赤面鼓ナニヤ事

見切場 布所豊川石原井口深川多羅品川白銀臺町麻布

新橋一丁松屋鷹

太鼓河晏防火隊

寛文二年二月八日市ヶ谷トクニヨ増益モ家承元年十月十三日代官町崩完済町
神樂坂ちふ減サルニ細骨の勢力同心皆山腰アリテのものハ法經以入人会
作骨ノ由ナリ

廣徳寺旧地 防火草井上由右衛門ハ七十七歳あるままで纏襷を着取
その傍に山腰火隊も廣徳寺の舊地ありトクニ書見アリトノモ老人の語
坐す本丸ノミナシハモレハモレハモレハモレハモレハモレハモレハモレハモレ
は寛政年の中の事也有りん堀田正勝紀一定
防火隊長の命を戴りて火隊を勤ち一年の事ありと中より石塙一基
を掘出セリ事行ク先モハ墓地あり一事はゆくあり

甲賀町 成田甲賀町ヒノ名ハ平塙伊賀ちのの庭中の櫻ふうと頃
たる名シト喬花町と以トありトカヤ

又接モハ法恩寺の経緯ハカウカタヒリ地あり今之甲賀町通のとく見え
ハ甲賀はカウカタの時セリ也

芭蕉倉

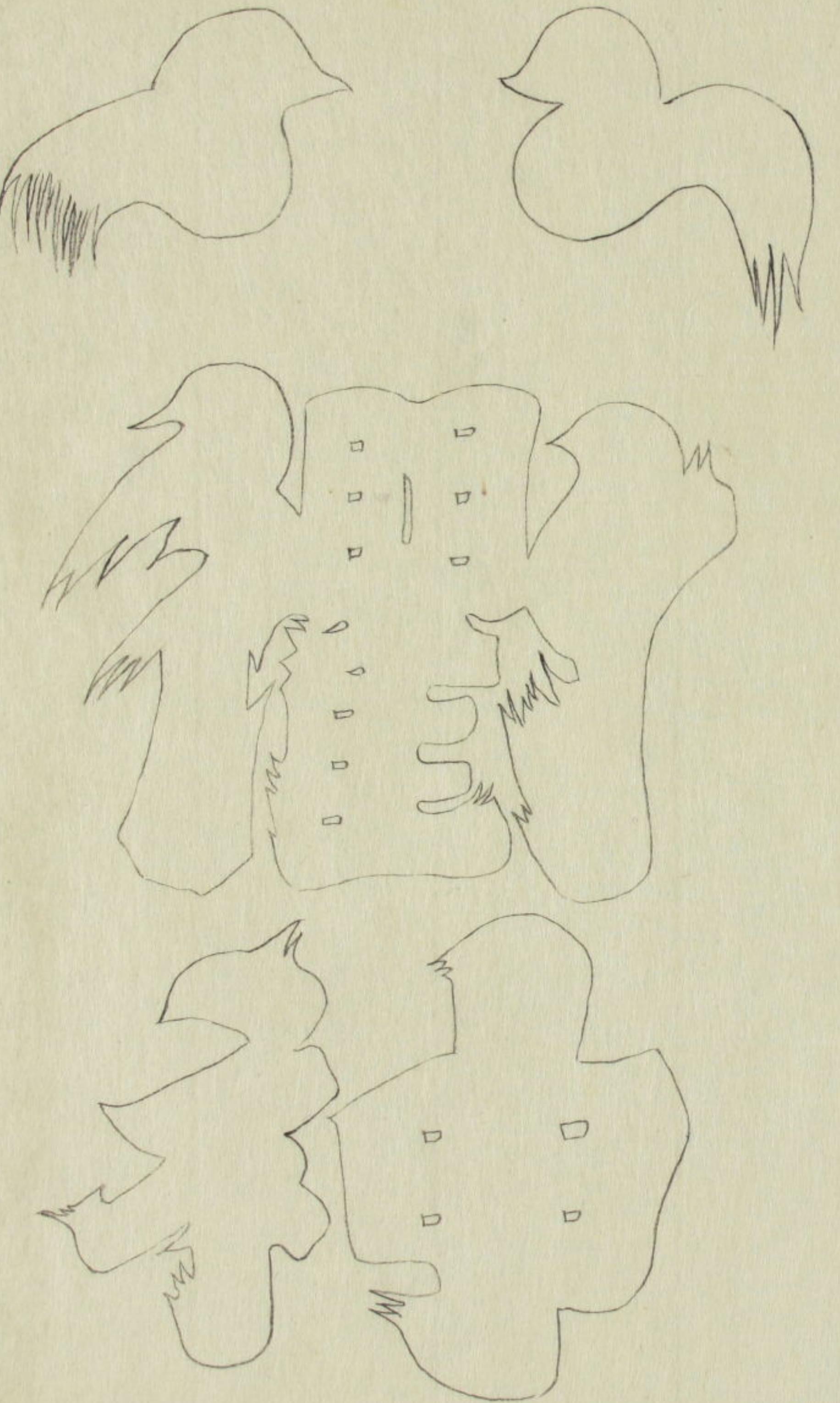
中野河内刺史の邸中少ありと傳ヒテ之先ヨリ御修築國より始て江戸小

某の子一時ひ娘中の食ふ経^キとソリ近きひまて芭蕉翁の像を
に有^リてか御事向乃萬師一納^シれて今^ハ雜草^ハ少^シ生^ムとも先年夢^シ
門人默^タう^カ

花^ハ多^シの奥^ハアラシモ芭蕉翁

芭^ハ多^シの事^ハ芭蕉翁集^ハとソリ小冊^ハを擇^シ

平井氏庭中八衢神社額四分之一白川叶将宣信朝臣書



寛政六年甲午五月七日癸巳書之

右少將源定信

吉田稻荷神社 神田川堤より

長福二年の事よりあるる吉田橋中入道道灌の戸城を取立ふ西丸より
稲荷を造営して山城を一公里より移すあるとて去る昭和九年年の災は
かゝる舊社を多く焼失して奉瀆定うる御と天正十八年八月

神祖の戸城小兵為 今侍の大神社をもたらしく駿河高尾に移し給ふ
至地今之の稻荷山也其頃ハ別當もしく社地も定まらず有様若林の高處也すこより按とも小神田神社も慶安八年山體河高根されど參るだけ地を若林些有属御賜くと即の地とすけ社も第次う參共内より有るる義善次が男八百萬束其の時より
靈社の尼殿内よりて常より厚く近きことを歎て慶安元年三年より
今より勧請奉らるゝとを頃ハ神社の大サセ尺五寸四寸にて東向あり今も
門前よりて御子のち物かて殊勝の作あり缺石壇もて時代詳りある
慶安十年よりて云々傳へ近世布魯約集時よりは遠くある修復者なり缺石を修むる時よりは遠くある修復者なり
報每ひ社へ参詣一法樂す若林八百萬束其裏の想をあへ我信を社へ

賽をもむと皆を嬉^ハされど^{シテ}は修祓者^ハは神社の事^ハ任せんとぞやそ
修祓者^ハ入^ハ社の別當^ハ給^フりと^シ志^スふれ^シたる事^ハうき^シひて別社の
傍^ハ居^ハを結^ヒ是^ハ所^ハの事^ハ禮^ハを執^フリ^{シテ}は修祓者^ハを觀ト^リと^シま^シ同
一^ハ家^ハの^ハあ^シう^シて^シ熱^トと^リは伐^ハ松^モ竜^モ安^シ院^モ園^モ林^モとあり^シ三^ハ度
三^ハの配^トある^シ多^シ付^シ若林^ハ右馬^ト男^ト初年^トより多^シ病^シて武家の勢^ハを
か^ドも^シき^シあ^シす^シあ^シ重^シ院^モ觀^ト法^觀ト^リと安^シ院^モ業^モと^リ是^トより今^シの
安^シ院^モ近^ト十^シ世^モ形^リぬ^シか^ア

縁記

押當社古田姫福乃御大明神^ハ人皇^ニ三^ト十三代元明天皇^ニ御宇^ナ和銅年中^ハ
神^ニ現^シ鎮座^シ也^シ昔^ニ敏達天皇^ニ六代の皇孫參議右大辨小野曾^モ兼和年中^ハ民
為^シ終者^ハ源波國^ニ跋流^ハ所^ニ海^中より白足^シ翁^ト福^トを^シらひて來^シて向^シ汝^モ岁^モ至^シ殊
帆^モ鷦^モの愁^シい^シそ^シ族^モの差^シ別^シわ^リ助^シ可^シ哀^ハ庖瘡^モの病苦^モ為^シ般^シ之^ハ福^ト之^ハ現^シ
て意^シ福^トを示^シす^シ秋^ハ是^ハ源波國^ニ東^シの移^シも古田姫命^モあ^リと^シ海底^モ入^ハ曾

古^シ神^ニ現^シ拜^シレ^シ御^シ彌^カ刻^シレ^シ御^シの靈^モ像^モ後^シ古^シ田^モ佐^シ中^モ入^シ道^モ灌^シ持^シ資^モ
靈^モ像^モ敬^シ拜^シ靈^モ駿^シ也^シそ^シて^シ極^シ軍^モ功^モ得^シ給^フシ^シ終^シ不^シ道^シ灌^シ底^モ豈^シ深
の向^シ武^モ列^シ豐^シ源^モ郡^モ戸^モ城^モ郭^モを築^シき^シ時^シ神^モ靈^モ白^シ流^シと^シ現^シ告^シ日^モ山^モ城^モ
一^シ石^モ重^シす^シも^シ車^モ年^モノ^シ庖^シ瘡^モ大^シ難^シ退^シく^シ國^モ家^モ長^シ久^シり^シ安^シ我^モを^シ信^シも^シ
依^シく^シ吉^シ運^モを^シ也^シ福^ト徳^モ自^シ聖^モ宗^モ就^シん^シと^シ義^モ中^モの^シ往^シふ^シく^シ持^シ資^モ信^シ仰^シ仰^シ有^シ
城^モ鬼^モよ^シ安^シ也^シと^シく^シ也^シく^シ里^モ移^シて^シ社^モ壇^モ破^シ壞^シよ^シく^シ一^シセ^シ若林^モ
並^シ次^シ三^シ手^モ折^シり^シ同^シ少^シ庖^シ瘡^モあ^リ愁^シあ^リ事^モ老^シ母^モは^シ福^ト乃^モ信^シを
も^シび^シ後^シ白^シ流^シの靈^モ駿^シを^シ多^シ同^シ茲^モ慶^シ安^シ元^モ年^モ九^シ月^モ南^シ社^モ建^シ立^シ有^シ今^シよ
ゆ^シ近^シ信^シ也^シ厚^シも^シ草^モ加^シ護^シひ^シ事^モ教^シく^シ窮^シ處^シ之^シ誠^シ無^シ變^シ靈^モ
像^モす^シ置^シ是^モを^シ敬^シざん^シヤ

予石鵞接頤元八去浦底筆者今為其子既男

ウ喜び

考文と曰ひ
あらそ浦彦とて
あくまうす宇松
思恭流とん

慶長十年乙酉夏月猶大

門の石鶴棟は因よ對ひてえまし狛犬の
石刻表せありとたよ是ありそりのりの
石ハ伊豆國木宮明神前の大石彌子
木宮御を加納年中よりのりのりのりのり
ともそんハ微とすことのみそんハ謡きかくとんと

かくもみある年暮のりのといひつを、長湯何事か
巻きをぬあり枝はまめと作まり
慶長の元魏へたゞれとひ坐よちと見る

本社の前より石瓶對ひきて是へえ綠二年六月廿日源田町の因辺伴多鷹あさりの
事もすまぬり明和の年ふかく是日石も多く壞もてつり一と通させよ今より
多情が神候もありまく其缺をふかく祀せり

余嘗傾首於此祠爰千有季實千神德顯然矣故爲報神恩
爲命石工其石如孤而置祠前而彌禱於國家安寧子孫無
礙正与因賦一絕以聊備不朽云爾

昌平橋側太田祠長護東城駿墓綏誰識經營道灌意德光
千歲最神奇元祐二年己巳

盥盤とどひか神の角にあり是ハ市各田町二丁自危根原小左衛門角屋
半右衛門本尾屋左少助の半右衛門の御用勤むるを紀列シ神の山用達法を遺と以て之入として
久保の久保と申す明和の弟ふあらきと申すを今のが都下源田町
三郎左衛門の死病を移りより靈塗を移り一山れがあり多子姓

天満宮

又尺四方の伊富多ノ御室あり勤達の時洋あく

瑞光社

三尺四方の伊富多ノ當社の御室の山養屋之

八幡宮

勤達の付定あく

疱瘡神社

神樂月並十八日小執行を神事行時より鳥羽をもと今のが安宣院
毎月一小を私定あくす院を初年の付柳志摩ことしの神人ありて月毎
か萬歳を執行しきりと志摩の七十歳の男ありてよしとて志摩の身
ちくわいとぞくされハ世神樂も久保より移りあり——あく

右駿河志一巻得友人山浦善藏牛澤本使謄寫以收于待賈堂維時萬延

辛酉歲三月上齋

江戸書會

活東子識

明治二十歲丁亥初冬

筆者

妻木賴徳

印

